

自尊心と自己効力感の日米比較研究
～自尊心の形成要因についての検討
Cross-cultural study on self-esteem and self-efficacy
between Japan and the USA

山本涼子
YAMAMOTO Ryoko

Cross-cultural research has been taken about self-esteem (SE) and self-efficacy (SEF). The scores of SE and SEF of American students are higher than these of Japanese students. No difference between Japanese students and Japanese, who have studied abroad, or between American students and foreign students in Japan. Different factors of SE are found between American and Japanese students. Personality, Hobby or skills, Overcoming experiences, and Sports have positive influence on Japanese SE, whereas Lifestyle and Friendship & relationship have positive influence on American SE. Sports is a negative factor of American SE.

Keyword: Self-esteem, Self-efficacy, Cross-cultural research

問題

James (1890) は自尊心(Self-esteem)を「自我の領域における自己評価の感情」と定義し、心理学的領域から研究しはじめた。James (1890)以降、Rosenberg(1965)や Janis & Field(1959)をはじめとする多くの社会心理学者が自尊心をテーマにした研究を進めるようになった。

自尊心の重要性について「存在脅威管理理論(Terror Management Theory)」と「ソシオメータ理論(Sociometer Theory)」を用いて説明することができる。前者は自尊心とは、死の不可避性という存在論的脅威を緩衝する装置として機能するという考え方で、後者の理論では、自尊心とは対人関係における受容感と密接な関係にあり、他者からの受容感が高いと自尊心は高い状態になり、逆に受容感が低いと自尊心も低い状態であるというものである。つまり自尊心は人間が社会的動物であり、周囲から受容されている程度を表わすバロメータとして機能すると考えられている。この他にも教育場面や臨床場面で自尊心がいかに人間にとって重要であるかは証明されている。

Bandura(1982)によって提唱された自己効力感(Self-Efficacy)はある結果を生み出すための行動をどの程度うまくできるかという個人の確信である。この概念は特定の行動に直結するだけではなく、大きな目標や結果に対する期待に機能する。この自己効力感は自尊心と相関があり、双方がパーソナリティや社会生活のあらゆる場面で個人に影響を及ぼす重要な概念である。

Markusら(1986)によると、自尊心には文化差の影響があるという。彼らはアメリカと日本の大学生を比較し、相互独立的自己観を持つアメリカ人は自己高揚場面を多く持ち、相互協調的自己観に基づいた文化にいる日本人は謙遜を美德とするため自己批判的な要素が強い。そのため日本人は欧米人に比べ自尊心が低いと述べられている。そのほかにも多くの研究によって日本人の自尊心は欧米人に比べ低いとされており、個人主義と協調主義がその考察に使われてきた。また Scholzら(2002)の自己効力感の国際比較研究でも日本は25カ国中最下位の得点であった。

しかし高野(1999)はこの日本人 = 協調主義、ア

メリカ人 = 個人主義に対して真っ向から反論している。多くの個人主義と協調主義を扱った研究を検証した結果、日本とアメリカの間に有意な差はないとした。また、自尊心を取り扱った研究は多くあるが、自尊心がどのように形成されるか、という形成要因の部分については論じられることが少ない。要因としてはいくつか考えられるが、樽木(1990b, 1991)はポジティブなフィードバックが自尊心低群に与えられたとき、効果があったことを示しており、ポジティブなメッセージ、特に親や友人など身近な他者からのポジティブなメッセージが自尊心の形成に影響を与えているだろうと考えた。

目的

これらの先行研究をふまえ、本研究の目的は自尊心と自己効力感について日米での国際比較を行い、2群間の文化差を新たなアプローチから検討することと、まだ明らかになっていない自尊心の形成要因について測定することのできる新たな尺度を作成し、その妥当性を検討することとする。

仮説

- 1.自尊心に関して、在日留学生、アメリカ人学生、日本人留学生、日本人学生の順番に高いだろう。
- 2.自己効力感についても自尊心と同じく、在日留学生、アメリカ人学生、日本人留学生、日本人学生の順番に高いだろう。
- 3.自尊心と自己効力感は高い相関を示すだろう。

方法

質問紙調査を面前自記式と留め置き法によって行った。質問紙は Rosenberg (1965)の自尊心尺度 10 項目、Scholz(2002)の Self-Efficacy Scale から 9 項目、予備調査を基に著者が作成した他者からのメッセージ尺度 16 項目、個人の経験に関する自信度 17 項目、社会とのかかわり項目群 4 項目を含む全 64 項目で構成された。全ての項目に 5 件法を採用している。

調査対象者は日本人大学生 114 名、留学経験者 24 名、アメリカ人大学生 170 名、在日外国人留学

生 19 名の計 327 名中、有効回答者数が 317 名であった。

結果

はじめに仮説 1 を検証する。自尊心についてアメリカ人学生、外国人留学生、日本人留学経験者、日本人学生の 4 群に対して、1 元配置の分散分析を行ったところ、条件において有意差がみられた $\{F(3, 315)=57.52, >.01\}$ アメリカ人学生と、日本人学生の間には有意な差が見られた。また、外国人留学生と日本人学生の間、日本人留学経験者とアメリカ人学生、日本人留学経験者と外国人留学生の間にも有意な差が見られた(すべて 1%水準)。日本人学生と日本人留学経験者の間には有意な差はなく、アメリカ人学生と外国人留学生の間にも有意な差は見られなかった。この結果により仮説 1 は支持された。

自己効力感についてアメリカ人学生、外国人留学生、日本人留学経験者、日本人学生の 4 群に対して、1 元配置の分散分析を行ったところ、条件において有意差が見られた $\{F(3, 316)=43.87, >.01\}$ 。アメリカ人学生と、日本人学生間、また外国人留学生と日本人学生の間、日本人留学経験者とアメリカ人学生、日本人留学経験者と外国人留学生の間にも有意な差が見られた(すべて 1%水準)。日本人学生と日本人留学経験者の間には有意な差はなく、アメリカ人学生と外国人留学生の間にも有意な差は見られなかった。

自尊心と自己効力感の相関係数を算出したところ、正の高い相関が見られた ($r=.664$)。

他者からのメッセージ尺度について日本人学生、留学経験のある日本人学生、アメリカ人学生、在日留学生の 4 群と男性、女性の一元配置の (4×2) 分散分析を行ったところ、日本人学生とアメリカ人学生、日本人学生と在日留学生のあいだに有意な差が見られた $\{F(3, 314)=9.81, >.05\}$ 。次に他者からのメッセージ尺度と自尊心の相関係数を算出したところ、有意な正の相関が見られた ($r=.465$)。

日本人の留学経験者と日本に留学中の外国人留学生にも調査に協力してもらった。はじめに留学経験と自尊心との相関係数を算出したところ、ほとんどの項目で相関は見られなかったが、「海外生活での人間関係」の自信度と自尊心に相関がみられた($r=.456$)。また在日外国人留学生については「日本での人間関係」の自信度と自尊心の間に相関がみられた($r=.514$)。

アメリカ人の調査対象者を民族によってカテゴリー化し、白人と非白人の自尊心の差を一元配置の分散分析により算出したところ、2群の間に有意な差は見られなかった。

留学経験の項目群と自己効力感の相関係数を算出したところ、海外生活での「ライフスタイル」、「仕事・アルバイトでの経験」、「役職・リーダーシップ経験」の自信度との間に正の相関が見られた。それぞれライフスタイルと自己効力感のあいだに $r=.336$ 、仕事・アルバイトでの経験と自己効力感のあいだに $r=.479$ 、役職・リーダーシップ経験と自己効力感のあいだに $r=.418$ であった。

考察

まず、自尊心と自己効力感について、日本人留学経験者と在日外国人留学生の2群は有意な差は見られなかったが、アメリカ人大学生と日本人大学生に非常に高い有意差が見られた。多くの先行研究において日本人の自尊心はアメリカ人に比べて低いという結果であり、本研究も同じ結果になった。このことをより詳しく検討するための個人の経験に関する自信度の項目群の平均の差をみると、アメリカ人>在日留学生>留学経験者>日本人という順になっており、自分の経験に関する自信に関してもアメリカ人の方が「自信がある」という結果であった。また社会とのかかわりの自信度についてもアメリカ人の方が高いということが明らかになり、自身のこれまでの経験に対する自信の差が自尊心および自己効力感に関する差に影響していると考えられる。また他者からのメッセージ尺度に関してもアメリカ人の方が高い結果であった

ため、ポジティブな周囲からのメッセージを受けた経験もアメリカ人の方が高いと感じていることが明らかとなった。このことに関して Markusら(1986)の結果で明らかとなったアメリカは自己高揚の文化であるということができよう。しかしながら、これまで行われてきた先行研究のほとんどが質問紙を用いて自尊心を測定してきた。これに対し、謙遜が美德とされる日本の文化においてアメリカと同じ形で、「自分に対して自信がある」と公に表出することができるだろうか。むしろ謙虚な姿勢で、求める自分象が高いあまりに現状の自分に対して自信がないととらえることもできるのではないだろうか。山口(2001)はハーバード大学と共同研究を行い、実験により自尊心を測定することを試みた。彼らはコンピュータを使った潜在的連合テスト IAT (Implicit Association Test)を開発し、潜在的な自尊心を日中米で比較したところ、三者間に有意な差は見られなかった。従来の質問紙調査において日本人に見られる特徴としてセンタリング・エフェクトが挙げられる。特に5件法の場合、「どちらでもない」という選択肢があるために、日本人はこの「どちらでもない」に寄ってしまう傾向がある。つまり心の中では自分に対して自信があり、自尊心や自己効力感も高いが、それを表には出さないようにしているのではないだろうか。これは潜在的自己観と顕在的自己観の差であるといえるだろう。ただしこの IAT は新しく開発されたテストであるため、まだ多くの追実験は行われていないので、今後の研究に期待したい。本研究の結果はアメリカ人の顕在的自尊心の強さを改めて証明したといえるだろう。

日本人の留学経験者は一般の日本人学生よりも自尊心や自己効力感が高く、外国人の在日留学生に関しても一般のアメリカ人よりも高いという仮説については、まず留学生の2群のサンプル数が著しく少なかったことも一つの要因として考えられるが、外国人留学生に関しては、関西大学の今期の交換留学生が主な回答者であったため、ほと

んどの留学生は在日3か月未満と在日歴が浅いため、留学直後のカルチャーショックや、言葉・文化の壁に直面している段階であったのではないかと考えられる。もしもこれが在日歴1年未満になれば仮説通りの結果が得られたのかもしれない。

留学生のみに回答を求めた留學生活中の各項目の自信度と自尊心の相関については、人間関係にのみ相関が得られた。しかし自己効力感に関しては「ライフスタイル」、「仕事・アルバイトでの経験」、「役職・リーダーシップ経験」の自信度との間に正の相関が見られた。このことから海外で得た経験は、これから何かの目標に向かって行動する時に、「自分は成し遂げられる」という確信につながっていると考えられるだろう。海外で生活し、「責任ある仕事や役職をやり遂げたと」という経験が今後の自分に対する結果期待につながるだろう。国際比較研究では言葉の違いによる差や、調査方法によって正しく同じ概念を測ることが難しいのが現状であり、本研究でもそれらの要因は少なからず影響していると考えられる。しかし、従来の日米の自尊心の差の検討に、周囲からのメッセージやこれまでの個人の経験という要因の影響を明確にすることができた。今後の研究において、これらの要因と潜在的自尊心の関連について検討していきたい。

引用文献

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change.. Psychological Review, 84(2), 191-215.

Kitayama, S., Markus, H., Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. (1997). Individual and

Collective Processes in the Construction of the Self :Self-Enhancement in the United States and Self-Criticism in Japan. Journal of Personality and Social Psychology, 72(6), 1245-1267.

Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press. Urte, U., Gutiérrez Doña, B., Sud, S., & Schwarzer, R. (2002). Is General Self-Efficacy a Universal Construct?. European Journal of Psychological Assessment, 18(3), 242-251.

北山, 忍(1998). 自己と感情 - 文化心理学による問いかけ -. 東京: 共立出版(株).

小室, 長沼, 才津, Parry, 落合. (2000). 青年期の自己の存在価値への信頼と親からのメッセージとの関連. 茨城県立医療大学紀要, 5, 109-118. 村上, 史郎& 山口, 勸(2001). The Implicit Association Test による潜在的自己観の検討. 日本グループ・ダイナミクス学会第49回大会発表論文集

脇本竜太郎(2005). 存在脅威管理理論の足跡と展望 - 文化内差・文化間差を組み込んだ包括的な理論化に向けて -. 実験社会心理学研究, 2, 165-179.

遠藤辰雄 井上祥司 & 蘭, 千尋(1992). セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探究. 京都: ナカニシヤ出版.

高野 陽太郎(2008). 「集団主義」という錯覚 - 日本人論の思い違いとその由来 -. 東京: 新曜社.

[転載・引用をご希望の場合は必ず事前に下記までご連絡ください。]

掲載責任者: 土田昭司

連絡先: tsuchida@kansai-u.ac.jp

最終更新日: 2009年4月4日